



転生したら、 なんか頼られるんですが 4

ALPHA POLIS

猫月晴

Nekozuki Haru

アルファライト文庫



登場人物紹介

ルフェンド

エルエルの兄。
ちよちよびりへたレだけど
心優しいお兄ちゃん。

セイリンゼ

エルエルの姉。
勝気たはで頼りになるお姉ちゃん。
魔法が得意。

コラン

魔物にも精霊にも
分類されなない謎生物。
やんちゃ。

ディノ

共和国の魔術師。
面倒見がよい。
感覚派で説明が下手。

セリナ

エルが王都で出会った少女。
訳ありのようで、
身分を隠している。

アイレット

共和国の魔術師。
活発で明るく、
街の皆から慕われている。

エルティード(エル)

本作の主人公で元・社畜社員。
常識外れな能力で、
いつもやりすぎしてしまうのが悩み。

1

この世界に生まれ変わってから、本当に色々なことがあった。

王国での異常事態、帝国での『災厄の日』の前触れ、夜鴉団と禁忌のこと。

様々な事件がありながらも、比較的この世界を楽しめていると俺——エルティード・レシス・アドストラムは自負している。

十年後、俺が十五になったときに来る、『災厄の日』——神様いわく、今回は災厄どころか終末のこと。聖女の力を使えば、世界を救えるかもしれないが、そうすると俺の存在が消えてしまう可能性がある。

終末という言葉は、まだ父様のゼルンドや、アドラード国王である馬鹿王ことヴァルド、研究を進めてくれている家庭教師のフルモンド先生には、話せていない。

何しろ今、彼らは俺がエルフの里から持ち帰った情報や、その他の情報をかき集め、新たな魔法体系の開発に奔走中なのだ。これは世界を救うため、ひいては俺を消えさせないためでもある。

せつかく災厄の日に向けての対策が軌道に乗ってきたところなのに、『終末』などという絶望的、かつ、不確定要素たっぷりの言葉を伝えられるわけがなかった。

またタイミングを見て話そう、話そうと思っているうちにどんどん時間が過ぎていき——ついに俺、エルティードは六歳の誕生日を迎えようとしていた。



「エルー、もう準備できた？」

「エル、早くー！」

「あとちよつとです」

扉の向こうから兄様と姉様の急かす声が聞こえてきて、慌てて止めていた手を動かす。どうやら今から王都に向かうのが、兄様のルフエンドも姉様のセイリンゼも、待ちきれないらしい。

でも、それも当然かもしれない。今日から三日間、大陸全土を巻き込んだ、五年に一度の盛大な祭り、創神祝日が開かれるのだから。

創神祝日とは、その名のとおり、創造神及び主要神——例えば生命神だとか剣神だとか

魔法神だとか——に感謝を捧げる日だ。

元々はそういう名目だったはずだが、長い歳月をかけて、民衆が思う存分はっちゃける日へと変化していった。もちろん元々の趣旨も残ってはいるが、今やお祭りのほうがメインだ。

そして三日後、創神祝日の最終日に、俺、エルティードは六歳の誕生日を迎える。

ブラコンである兄姉たちが浮き足立っているのは、お祭りだけでなく、そのせいもあるのかもしれない。

「エル、まだなのー？」

また姉様の声が聞こえてきた。せっかちな兄姉たちだ。

慌てて準備を終え、扉を開ける。そこには目をキラキラと輝かせた兄様と姉様が、待ちきれない様子で立っていた。

「今日のお祭り、屋台もいっぱい出るんだって！」

「色々な催しもあるそうよ！ ほら、早く早くー！」

兄様と姉様はこの日を随分楽しみにしていたらしい。いつになく興奮した様子だ。

「はいはい、ちよつと落ち着いて。どうせもうすぐ出かけるんですから」

そうたしなめると、二人は少しだけ静かになった。

依然として、そわそわとして落ち着かない様子ではあるが。

ほどなくして仕度を終えた父様と母様のアーネヴィも合流し、皆が玄関に集まった。

父様は転移ゲートを作り出すと、それをくぐり抜ける前に俺たちのほうを振り返った。

「楽しみにしているのはいいが、まずは教会からだぞ。今日は神に感謝する日なんだから、いつも以上にしっかりと祈りすること。いいな？」

浮き足立っている俺たちに、父様はそう釘を刺した。

現在ではすっかりお祭りがメインとなっているが、本来ならば肅々と神に祈りを捧げる日なのだ。

「まあまあ、皆お祭りが楽しみなよ。そんなに怖い顔をしなくたっていいじゃない。私の可愛い子供たちは、きちんと神様に感謝できるわよね？」

母様はふわりと柔らかな微笑みを浮かべてそう言った。それに、兄様と姉様が元氣よく応える。

父様はそれを横目で見て、フツと笑う。

そして、皆で転移ゲートをくぐった。

ゲートをくぐった先には、洗礼式のときと同じく、真っ白な教会が佇んでいた。教会に來たのは五歳の洗礼式のときだから、ここに来るのは一年ぶりぐらいだ。

思えばこの一年は、なんだか慌ただしい出来事ばかりで、あつという間に過ぎてしまったように思う。一年前を懐かしみながら、教会の巨大な扉を通り、ステンドグラスで色づいた光が差し込む廊下を歩いていく。

昨年と同じように、全身純白の衣装を身にまとった神父に迎ええられた。

「皆様、お久しぶりでございます。この度は——」

「堅苦しい挨拶はいい。子供たちはこの後の祭りを楽しみにしててな。長つたらしい挨拶を交わしていると、私が怒られてしまいそうなんだ」

「そうでございましたか。これは失礼を。それではこちらへどうぞ」

父様の言葉に神父はそう返して、教会の奥に設けられた祭壇のところまで俺たちを連れていった。

祭壇の両脇には燭台、上には沢山の果物や装飾品が並べられている。

俺たちは祭壇の前に跪き、胸の前で手を合わせた。

俺に関しては信仰心がないたため、ほとんど形だけのようなものだ。それでもなんだか心が落ち着くような気がした。

少しの間祈りを捧げると、隣で人が動く気配があつて、目を開けた。

隣を見ると、もう父様は目を開け、立ち上がろうとしているところだった。

俺も慌てて合わせた手を崩し、父様の後ろに続く。

父様は脇で待っていた神父のもとへ向かおうとしたが、ふと何かを思い出したように足を止めた。

「私たちは少し話があるから、お前たちは先に祭りに行ってきなさい。もう待ちきれないんだろう」

兄様が小さく「やったー」と呟くのが聞こえる。

途端に飛び出ていこうとする兄様と姉様をなんとか止めて、神父にお辞儀をしてから教会を出る。

「気をつけるんだぞ」と言う、父様の声が後ろから聞こえたが、俺の手を掴んだまま走り出した兄様と姉様のせいで、振り向くことは叶わなかった。

2

「うわあ……！　すごい活気！」

王都中心の大通りを見渡しながら、思わずそう口にする。

創神祝日の王都は、普段とは全く雰囲気違った。

通りに面した店は競い合うように飾り立てられ、紐飾りや旗が風になびいている。

道を行き交う人々の服装も、心なしか明るい色合いのものが多く、その足取りは軽かった。どこからか聞こえてくる音楽を辿ると、そこにはギターののようなウクレレのような楽器を持った人々がいて、その周囲はなかなか賑わっている。

投げ銭用に置かれた帽子にも、たつぷりと硬貨が入っている。

所狭しと、競うようにして、色とりどりのテントの屋台も出ており、本当に賑やかだ。

「エル、まずは何から見る？　やっぱり食べ物？」

「待って兄様。創神祝日って言ったらやっぱり催しに決まってるわ。先に広場のほうに行きましょうよ」

兄様と姉様は、目をこれでもかというほど、キラッキラに輝かせながら、そう言った。

よっぽど今日という日を楽しみにしていたらしい。

「落ち着いてくださいってば。三日間もあるんだからゆっくり見ればいいでしょ。そうだなあ……とりあえず広場のほうへ向かいながら、道沿いの屋台でも見ましようか」

俺が折衷案を出すと、兄様と姉様は満足げに頷いた。

あちこちに出ている店や、さらびやかな装飾に視線を奪われながら、三人並んで大通り

を歩く。

道を行く人々は家族や友人、それから恋人や夫婦も多い。皆、楽しげに話しながら歩いている。

広場が見えてきたところで、ある屋台の前で兄様が足を止めた。

「見てよエル、くじをやっている屋台があるよ！ 一等は……一日限定で屋台の商品食べ放題!」

兄様はそう言うと、分かりやすく目を輝かせた。兄様はおとなしく優しいので、一見落ち着いていて大人っぽく見えるが、意外と食いしん坊で欲張りだ。

「どうせ当たらないわよ？ やめときなさいよ」

現実主義な姉様が冷めた声でそう言うものの、兄様はそれをものとしめない。

「ええっと、銅貨五枚……」

兄様はポケットから取り出した銅貨を数え、くじの屋台へと駆け足で向かっていった。くじの屋台には数人が並んでいて、兄様はその最後尾に並ぶ。

「ここで待ってましょ」

そう言って姉様はすぐ近くにあつた段差に腰かけた。

俺もそこに座って兄様を待つことにする。

楽しそうにくじを引きにいった兄様を、どうせ当たらないだろう、とか思いながら眺める。くじは商店街にあるような、ガラガラと回して中から色付きの玉が出てくる、古典的なタイプのものだ。

どうやら金色、銀色、青色、赤色、黄色の順で五等まであり、白は残念賞らしい。

残念賞は屋台で売っているちよつとしたものや、調味料や小皿などの日用品がもらえる。と書いてある。

兄様が取っ手に手をかける。最初はただ見ているだけだったのに、俺もなんだかドキドキしてしまふ。コロ……とガラガラから玉が転がり出る。

しかし手前に立っている兄様が邪魔になつて、肝心の色が見えない。

俺と姉様が色を見ようと立ち上がった瞬間、ベルの音が鳴った。

「一等！ 一等賞だ！ おめでとう！」

店の人が派手にベルを鳴らしながら、大きな声でそう言う。

俺たちはあつけに取られてその様子を見ていた。

俺が立ち尽くしている間に、くじを引き終えた兄様が戻ってきた。

姉様も俺と同じようで、二人で呆然としながら、兄様の手の中のものを見る。

「に、兄様、これは……」

兄様が持っている、やけに凝った、その割に絶妙にグサイ装飾が施された紙切れには……デカデカと大きな文字で——『屋台の商品一日無料食べ放題』と書かれていた。

「これで今日は食べ放題だよ！」

兄様は食べ放題券を手には、満面の笑みでそう言った。

当てちゃった。当てちゃったよ、この人。

嬉しそうに兄様を前に口に出しこそしなかったものの、俺は内心かなり驚いていた。

姉様も同じように驚いているらしく、信じられないものを見るような目をしていた。

「これください！」

「これもください！」

「あ、それもください！」

兄様は食べ放題券を片手に着々と屋台の食べ物を買ひ占めていき、ついには俺たち三人の両手が全てふさがってしまった。

巨大わたがし、謎肉の串焼き、手作りクッキー、やけに鮮やかなキャンディ、怪しげな色をした果物、その他諸々……

「兄様いくら無料だからって流石に買いすぎじゃ……本当にこれ全部食べる気ですか？」

「え？ もちろん」

兄様に何を言っているんだ、という顔をされる。

本当に全部食べられるのか疑わしいが、買ってしまったものは仕方がない。

結局俺も手伝うことになるんだろなあ……

「ええっと、どこか座れるところは……」

お行儀のいい兄様には、立ち食いという発想がなかったようで、キョロキョロと辺りを見回して座れる場所を探している。

しかしいくつか設置されているベンチは既に満員だし、垣根の近くなど座れそうな場所も全て埋まっている。

くじを引く前はそんなことはなかったのに、屋台を回っている間に随分人が集まったらしい。

兄様が眉尻をへにやりと下げたときだった。

「おーい、エルティードたち！ こっちにおいでよ！」

声の方向を見ると、アドラード王国の王子であり、僕らの同級生でもあるルシアが、ベンチに腰かけ、俺たちに向かって手を振っていた。

「ルシア！ 来てんだね」

「こんな楽しい日に、来ないわけがないだろう」

ルシアは言葉どおり、楽しそうに言った。

普段よりも装飾が控えめの服装をしている辺り、お忍びで来ているのだろう。

王子殿下だとバレたら大騒ぎになるだろうし。

それはそうと、周りに護衛らしき人が見当たらない。

前にルシアは学園で命を狙われて大怪我をしているし、そうでなくても王子が一人で町に来るのを許されるわけがない。

「まさかルシア……こっそり王宮を抜け出してきたんじゃ」

にこり。俺が言うと、ルシアは無言で王子スマイルを浮かべた。

「兄様、姉様、ちよっと待っててください。ちよっと王宮に連絡してきます」

「ま、待つんだエルティード！ 今のは冗談だ、きちんと許可は取った」

「……本当に？」

「本当だよ、護衛だって連れてる」

ルシアがそう言った瞬間、雑踏の中にいた人が手を振った。

その人はすぐにまた人混みに紛れてしまったので顔は確認できなかったが、気さくな人物のようだ。

そして手だけ振ってすぐに去っていく辺り、お忍び護衛のプロである。

「ほら、言っただろ」

「分かったけど、こういう冗談はやめてよ。本気で告げ口するところだった。自慢じゃないけど、僕は騙されやすいんだからな」

「ごめんごめん。とりあえず座りなよ」

俺に向かってそう言って、ルシアは自分の横を叩いた。

ここはちょうど大通りからは茂みで隠れる形になっているからか、あまり人がやってこないようだ。ルシアが座っているベンチと、もう一つ小さなベンチが空いていた。

俺を取り合う喧嘩を未然に防ぐべく、ルシアが座っているほうに座る。兄様と姉様は不服そうな顔をしながら、二人で小さなベンチに座った。ルシアは苦笑している。

買ってきたものをくもくと食べ始めた兄様を横目に、茂みの向こうに見える通りを眺める。

本当に今日は人が多い。流石五年に一度の大きな祭りだ。きつと皆楽しみにしていたに違いない。

『キュッ』

「……ん？」

今、どこからか妙な音が聞こえたような。小動物か何かの鳴き声みたいだった。しかし辺りにそれらしき動物は見当たらない。せいぜい遠くの屋根の上に小鳥が止まっているぐらいだ。

『キュ、キュキュッ！』

「んん……？」

もう一度、さっきより大きな鳴き声が聞こえた。一体どこから聞こえているのだろうか。ベンチの下や茂みの中も覗き込んでみるが、やっぱりどこにもそんな動物はいない。

「エル、どうかしたの？」

兄様は半分ぐらいの大きさになったわたがしを片手にそう言った。

「どこからか動物の鳴き声が聞こえるような気がして……」

『キュッ！！』

「……ほらね」

俺はそう言いながら、皆を見る。

今度の鳴き声は全員に聞こえたようで、兄様だけでなく、姉様、ルシア、さらには雑踏に紛れている護衛の人の視線まで、俺へと向けられる。

「一体どこに……」

不思議に思っただけでベンチから立ち上がった瞬間、手に持っていた紙袋がもぞもぞと動いた。

『キュ！』

そして中から、薄いピンク色をした、モフモフの小動物が顔を出した。

口の周りにクッキーの食べかすをつけている。

「うわっ！」

びつくりして袋から手を離してしまう。地面に落ちた紙袋からは、ドスン、と明らかにクッキーから出るものではない重みのある音がした。

『ンギュ……』

おまけにそんな鳴き声まで聞こえてきたので、さっきの動物が心配になってきた。しかし、怖いものは怖い。

一体どうしてクッキーが入っていたはずの紙袋に、謎の動物が入っているんだ。

放置するわけにもいかず、そっと地面に落ちていた紙袋に忍び寄る。

他の皆も息を呑んで見守っており、緊張感が漂う。

覚悟を決めて紙袋の端をつまもうとしたとき、ピンク色の物体が目にもとまらぬ速さで紙袋から飛び出した。残像しか見えなかった。

袋から飛び出たそれは俺の背中をよじ上っているらしく、爪が立てられる感触と確かな

重みを感じる。

振り払おうとものがけど、それは俺から離れることはなく、ついには俺の右肩に到達した。

「こ、このっ！ 何するんだ！」

モフ、と頬に触れていた謎の生物を両手で掴んで、肩から引き剥がす。

『キュ！』

威勢よく鳴き声を上げたそれは、くりくりとした大きな瞳で俺を見ている。

小さくて丸っこい耳に、とろけるような手触りの薄ピンク色の体毛。

その姿には見覚えがあった。チンチラだ。

直接見たことはないが、前世のテレビ番組で、チンチラ特集をやっているのを見たことがある。

しかし、その額には見覚えのないもの——サファイアブルーの小さな角が生えている。

思わずちよん、と触れてみたくなるが、食べかすのついた口元から見え隠れする立派な前歯を見て、やめておいた。

「全部、食べられてる……」

兄様が紙袋の中を覗きながら、悲しげな声でそう言った。

兄様が紙袋をひっくり返しても、中からは何も落ちてこない。正真正銘のすっからかん

だった。

兄様はますます悲しそうな顔になった。

『キュ？』

謎の小動物改め、ツノのあるチンチラは、無垢な瞳でこちらを見ている。

これだけ大騒ぎさせた上、クッキーまで食べつくしておいていい態度である。

「エル、その子貸してよ！ わたしも触りたいわ！」

姉様が目をキラキラさせながら、そう言った。

「だめですよ、こいつがもし噛んだりなんかしたら……って、痛あ！」

ガブリ。立派な前歯が指に突き刺さり、俺は思わず叫び声を上げた。

拘束が緩んだ隙に、やつは俺の手から抜け出し、姉様の肩へと飛び移った。

「姉様、そいつから今すぐ離れ——」

「わっ、ふわふわで可愛いわね！」

やつは姉様の頬にすり寄り、自身のモフモフをアピールしながら、俺のときとは違っておとなしくしている。

俺の肩に乗っていたときは、もっと爪を立てていたような気がするが。

心なしか、細められた大きな目が憎たらしく見える。

「……それ、コランダムロウデントじゃないか？」

少し離れて、俺たちを見ていたルシアがそう言った。

「こらんだむ……なんだって？」

いきなり並べ立てられた知らない単語に、思わずそう聞き返す。

「コランダムロウデントだ。寶石ネズミと呼ばれることもある。ものすごく希少な生物のはずなんだけど、どうしてこんなところにいるんだろう」

そう説明されても、角のあるチンチラ、もといコランダムロウデントはおとなしく、キョトンとした顔をして、こちらを見ている。

兄様もコランダムロウデントのことが気になるのか、姉様の肩に乗っているそれに、そろそろと近付いていく。

「いったあー」

触つてみようと手を出した兄様が思いきり噛まれた。

訂正。おとなしくなんてない。とんだ狂暴なネズミだ。

それを見たルシアは、離れた位置から、さらに後ずさりをする。

「まさかルシア、あれが怖いのか？」

俺がそう言うと、ルシアはあからさまに目を逸らして苦笑いした。

「その、僕ってあまり動物に好かれなないみたいで。犬に追いかけられたり、猫に引かれたり、昔からあまりいい思い出がないんだよね……」

ルシアは足元に視線を落として恥ずかしそうにそう言った。

いくら成績優秀、文武両道で王子たるルシアといえども、完璧ではないらしい。

俺を女と勘違いして婚約を申し込んだこともあったぐらいだし、案外抜けているところや、愛されキャラ的な一面もあるのかもしれない。

まあ、あれは馬鹿王がルシアを焚きつけたというか……止めなかったのめどうかと思うが。

「……何かおかしい？」

俺がニヤニヤしていると、ルシアが唇を尖らせてそう言った。

「そういうわけじゃないけど。むしろ苦手なことぐらいあったほうがいいと思うよ」

そう言っても、ルシアは不満げな顔のままだった。完璧主義なやつだ。

「コホン、話を戻そうか。コランダムロウデントは幻想種と呼ばれる希少な生物の一種だ。本来こんな町中で出くわすわけがない」

「幻想種？」

思わずそう聞き返す。初めて聞く言葉だ。

てつきりこつちの世界のチンチラは角が生えているのかと思つたが、違ふのだろうか。
 「魔物とも精霊ともつかない、未分類の生物の総称だよ。人里を避け山奥を好む、希少な生物だ。分かりやすいものだ……そうだな、上位のドラゴンとかも幻想種に属すんじゃないかな」

ルシアは自分の中にある知識を思い出しているのか、斜め上を見ながらそう説明した。
 上位のドラゴン——それなら、魔の森に棲んでいる巨大ドラゴンのウォン、もしかすると彼も幻想種なのかもしれない。てつきり魔物とばかり思っていたが。

今度本人、いや本ドラゴンに聞いてみよう。

「幻想種か……」

そう言いながら、姉様の肩に乗ったままのコランダムロウデントに目をやる。

やつは俺を見ると、ぱちくりと瞬きをした。

ここから見ている分には可愛いのに、近付こうものならガブリ、なのだ。

なんて恐ろしい生物だろう。

『キュ?』

自分のことだと分かっているのかいないのか、コランダムロウデントはそんな鳴き声を上げた。

「どこからか逃げ出してきたのかな?」

「それはあり得ないよ。幻想種の捕獲・売買は禁止されているし、彼らは高い魔力と知能を有していて、そう簡単に捕まえることができない。幻想種のほうからついてこない限りはね」

俺の疑問に対して、ルシアがコランダムロウデントを見つめながらそう言った。

ルシアは動物が苦手と言っていたが、どうやら興味はあるらしい。こうして長々と説明してくれるぐらいだし。

「幻想種のほうからついてくるって……そんなことあるの?」

「あるんじゃないか? 目の前の状況を見るには。あんまり聞いたことはないけど、あり得ない話じゃない」

ルシアに質問してみたら、そんなことを説明された。

当のコランダムロウデントはくりくりした目でこちらを見つめているだけだ。

突然、喋り出したりはしない。

「……知能、あるかな」

「さあ」

俺が言うと、ルシアは肩をすくめて答えた。

コランダムロウデントはというと、引き続き姉様の肩に乗って、能天気にもぶくろいまで始めている。

「なんにせよ、幻想種をこのままにはしておけないよ。迷子^{まいご}になってここに来たんだらうけど……ねえ君、帰り道は分かる？」

ルシアはおそろおそろコランダムロウデントに近付いて、優しくそう問いかけた。しかし、やつはあるうことかその顔を引っかき……は流石にしなかった。

すんでのところでやめた。ひとまず実行はしなかったのでよしとする。

そして、その引っかこうとしていた手を下げると、ふるふると首を横に振った。

「そうか、困ったな。じゃあひとまずどこかで保護を——」

「待て待て、なんで意思疎通^{いしそつう}できてるの？」

危ない、うっかり受け入れそうになった。

突然割り込んだきた俺に、ルシアは怪訝^{けげん}な顔をしている。

「さつき高い知能があるって言ったじゃないか」

「とはいっても、目の前で実際にやられるとびつくりするとか……」

「そう？」

ルシアは不思議そうな顔をしている。

コランダムロウデントはしばらくルシアの顔を眺めていたが、ふと思い立ったように、今度はルシアの頭に飛び移った。

「わっ!？」

ルシアは反射的に頭を振ったが、コランダムロウデントは髪^{かみ}にしがみついて離れない。

「ル、ルシア! じつとしないと髪抜けそうだって!」

俺がそう言うのと、声に反応したのかコランダムロウデントが今度は俺の目を見た。

やけにじつと見据^{みす}えられているような。嫌^{いや}な予感がする。

『キュッ!』

やつは小さな叫び声を上げ、今度は俺の肩に飛び移った。

ズシ、と小さな体に見合わない、なかなかの重みが肩に伝わる。

肩に視線をやると、コランダムロウデントは目を細めて満足げな表情を浮かべている……ような気がした。

「お前、姉様の肩がよかったんじゃないのか？」

『キュウ?』

無邪気な顔でそう返事をされると、悪い気はしない。肩は重い。

「このコランダムロウデント、長いからコランでいいや。何も分からない以上、勝手に連



れていくわけにもいかないし。どうしようか」

そう言いながら一同の顔を見渡すも、皆困った顔をしている。

「このままじゃお祭りも回れないし……」

困り果てて呟いたそのとき、人混みの向こうから誰かが走ってくるのが見えた。

一直線にこちらを目指してやってきているように見える。

ここからでは顔はよく見えないが、女性であることと、背格好からまだ年若い人物であることが分かった。

この国の成人年齢である十五歳に届いているかいないかといったところだ。
ところにもかくにも全力で走っている。

そして彼女は俺たちの前までやってくると、ふっと力が抜けたように地面にへたり込んだ。

「だ、大丈夫ですか!？」

「はっ、はあ、サ、サフィロスは……」

肩にコランが乗ったままなのも忘れて咄嗟に駆け寄ると、彼女は息も絶え絶えにそう言った。

「サフィロス？　もしかしてこの子のこと？」

俺が自分の肩を指さしてそう言うと、彼女はバツと顔を上げて、コランを仰ぎ見た。

「あ、ああサフィロス、ここにいたのね。突然どこかへ行ってしまったから、わたしどうしようかと……」

そう言って彼女はコランに手を伸ばした。コランはその手に噛みつくことなく、するすると腕をよじ上り、彼女の肩に収まった。

「待て」

後ろから鋭い声が聞こえて振り向くと、先ほど手を振ってくれた護衛の人が、ルシアを守るように立ちはだかつていた。

「ごめんなさい、驚かせたよね。でも、その……怪しいものではないから」

彼女は困ったように笑って、ズボンの汚れを払いながら立ち上がった。

落ち着いて見ると、彼女はかなり目を引く容姿をしていた。

もしも道ですれ違ったとしたら、必ず振り向くと言えるぐらいだ。

高い位置で結い上げられた燃えるような赤髪に、髪よりはオレンジがかかった、鮮やかな赤色の瞳。

そして整った目鼻立ち。背筋はピシッと気持ちいいぐらいに伸びている。

強い色の髪とピシリとした佇まいは、浮かべられた笑顔がなければ、威圧感さえ覚える。

しかしそんな容姿に反して、服装は地味で、生成り色のブラウスに薄茶色のズボンを合わせている。この国では女性のパンツスタイルは珍しく、ズボンをかく女性は冒険者くらいだ。

彼女も冒険者なのだろうか。

「サフィロスを拾ってくれてありがとう、感謝するよ」

「あなたがこの子の飼主？」

俺は突如現れた女性にそう問いかける。

さつきルシアが捕獲・売買は禁止とか言っていたような気がするが……

「いいえ、この子が森から勝手についてきたの。この国の法には触れていないはずだから安心してね。証明できるものはないんだけどさ……」

彼女は頬をかきながらそう言った。

微笑みを浮かべていた彼女だったが、ハッと何かに気付いたように目を見開いた。

みるみるうちに顔面が蒼白になっていく。

「あつ、まさかあなた、わたしを衛兵に突き出そうとしてる？ お願いだから見逃してくれない!? 確かに身分もサフィロスのことも証明できるものはないけど、嘘は一つもついていないから!」

「お、落ち着いてよ。別に衛兵に突き出すつもりなんてないし、嘘をついてるとも、思っていないから。そういうこともあるって聞いたし」

焦ったようにまくしたてる彼女を、俺はそう言っただめ。

彼女は胸を撫で下ろし、大げさに安心する素振りを見せた。

彼女には『サフィロス』と呼ばれている、この状況を作り出した張本人は、呑気な顔でくしくしと髭を整えている。

「ところであなたは？」

俺がそう尋ねると、彼女は驚いたような顔をしたあと、きりと表情を引き締めた。

「ごめんなさい、名乗ってなかったね。わたしはセリヌ・ラム……ごほん、セリナよ」

胸に手を当ててそう言くと、彼女、セリナさんはにこりと笑みを浮かべて見せた。

セリナさんがわざとらしい咳払いを挟む前に言った名前に、何故か聞き覚えがあつて、首を傾げる。

セリヌ、セリヌ……一体どこでそんな名を聞いたんだったか。しかし記憶の引き出しはつかえてしまったように、聞いてくれない。

「……何か変なところでもあつたかな？」

黙ってしまった俺を見て、セリナさんは不安げにそう言う。

『キユ、キユキュッ！』

「わ、どうしたのサフィロス！ 今日はいつにもまして元気ね」

セリナさんの肩の上で、サフィロスが落ち着かない様子で動き始めた。

そこそこの重みのものが肩の上でちょまかと動き回るものだから、セリナさんも苦労している。

「ちょっと、じつとして……わわっ！」

バランスを崩した拍子に石畳に躓き、セリナさんが危うく転びそうになる。

受け止めようと思わず手を出す、セリナさんはくりと一回転し、見事にもとの体勢に戻った。

しかし、緩めにまとめてあつた髪がほどけてしまい、鮮やかな赤髪が肩にかかる。

「ふう、危ない危ない。サフィロスったら、本当にどうしたの」

そう言っ、セリナさんが左肩にいるサフィロスへと視線を向ける。

サフィロスがおいたをしたせいか、今までずっとにこにこしていた彼女から、一瞬だけ笑みが消えた。

鮮やかな赤い髪を下ろし、凜とした表情をしている……その光景には、確かに見覚えがある。

そこで俺はやつと、どこで『セリーヌ』という名を見かけたのかを思い出した。

「あ、ああーっ!! あなたは——」

そこまで言つて、自分で自分の口を塞ぐ。

セリナさんは不可解な顔で俺を見ている。

「な、なんでもないです。ちよつと、ちよつと空を何かが横切っただけで」

「そう? ドラゴンか何かかな」

俺の苦しい言い訳を聞いて、セリナさんが首を傾げる。

やれやれ、なんとか誤魔化されてくれて助かった。

王宮ですれ違い、帝国で肖像画も見た。

彼女は『セリーヌ・ラムダ』——隣国、ラムダ帝国の皇帝だ。

俺がなんやかんやあつて帝国を訪れたときは、皇帝が行方不明だったため、直接は会つていない。

しかし、特徴的な燃えるような赤髪と、うっかり名乗りかけた本名からして、肖像画で見た人物で間違いないだろう。

一体何がどうなつて隣国の皇帝が、王国の祭りなんかにいるのか。

彼女にも何か事情があるのかもしれないが、ラムダ帝国の宰相——ウインスさんの困り

ようや、国の荒れようを見た俺からすると、非常に気まずい。早く国に帰つてやつてくれという気持ちだ。

それにしても、肖像画で見たより、少し若く見える。

絶え間なくニコニコとフレンドリーに笑っているからだろうか。

「お騒がせしてごめんね、サフィロスのことはありがとう。この恩は忘れないよ」

セリナさんはそう言つてお辞儀をしたあと、引き止める間もなく颯爽と去つていった。

追いかけてよとするが、すぐに人混みに紛れて見えなくなつてしまったのを見て諦めた。

チンチラもどき改めサフィロスのこととか、帝国のこととか、色々聞きたいことがあつただけど……行つてしまったものは仕方がない。

またどこかで会う機会があれば聞いてみよう。

「ルシア様、少々お伝えすることが」

「なんだい?」

「王宮から連絡がございまして……」

ルシアと護衛の人が何やらごによごに話している。

話を終えると、ルシアはあからさまに残念そうな顔をした。

「人が増えてきたから、そろそろ帰つてこいだつてさ。全く、今からが楽しいのになあ……」

ルシアはやれやれという風にそう言った。

わざとらしくも見えるが、表情を見るに、どうやら本心から相当残念がっているようだ。

「仕方ないよ。学園でのこともあつたばかりだし」

「……そうだな。残念だけど君の言うとおりだ。じゃあ僕は帰るよ。エルティードたちは僕の分までお祭りを楽しんできて」

ルシアはそう言つて立ち上がったが、歩き出す前にもう一度俺たちのほうを振り返つた。

「土産話、期待しているよ。エルティードたちの周りでは、いつも面白いことが起こるからね」

「そんな期待をされてもなあ」

「じゃあまた。エルティードの誕生祝いには僕も呼んでくれよ」

ルシアは一方的にそう言つと、護衛の人に連れられて去つていった。

その姿はすぐに人混みに紛れて消える。

前世ではぼつちだったためすっかり忘れていたが、そうか、友達ができた今、誕生パーティーに友達を呼ぶ、というイベントが発生するのか。

別に誕生日やパーティーが嫌なわけじゃない。ただ……兄様と姉様がどんなブラコンぶりを発揮するのかが怖いだけだ。

家族だけなら微笑ましいものだが、友人を呼ぶならば少しはセーブしてほしい。

ちらりと後ろにいた兄様と姉様を見やる。

いつの間にか、兄様は両手いっぱい抱えていたものを全て食べきつていた。

口の周りに食べかすがついているのはご愛嬌である。こうしてみると、クッキーの袋から出てきたときのコランダムロウデントに似ていなくもない。

「兄様、よく一人で全部食べきりましたね……」

思わずそう言つと、兄様はなんのことだか分かっていなさそうな顔をした。

屋台もひとまず堪能し終えたところで、俺たちは予定どおり広場へと向かうことにした。広場周辺の道はどこも大勢の人で混み合つていて、幼く体の小さい俺たちは人と人との間に埋もれるようにして進んだ。

「目、目が回る……」

「兄様、しっかりしなさいよ」

目を回している兄様に、姉様が厳しい声でそう言う。

姉様は時々母様と一緒にウインドーショッピングに出かけるので、兄様よりかは人混みに慣れているらしい。

兄様のみならず、俺まで目を回しかけたところで、周囲の人が散つていき、ことなきを

得た。

どうやら広場に到着しようだ。

王都中心にある広場はとても広く、立派なつくりをしていた。

中央に大きな噴水があり、その左右にも小さな噴水が設置されている。そして垣根には色とりどりの花々が咲き誇っていた。

そして何より目を引くのは、広場の奥に設けられた大きなスペースだ。

そこだけ柵で囲われており、脇には何やら看板が置いてある。

その看板には鮮やかな、デカデカとした文字で、『最強決定戦』という、馬鹿が考えたような言葉が記載されていた。

意味は分かる。要は武道大会か何かだろう。しかしその直接的すぎるネーミングはどうか。かならなかったのか。

開始時間を見るに、もうすぐ始まるようだ。

「君たちもこの大会を観戦するのかい？」

近くにいた人のやさそうなおじさんが、身をかがめて俺たちにそう言った。

俺はまだ何も言っていないというのに、兄様と姉様が力強く頷く。

「ならあっちのほうへ行くといい。あの辺りは眺めがいい割に空いてるんだ」

「エル、早く行こう！」

おじさんの話を聞くなり、兄様がそう言っただけの手を引く。俺は慌てておじさんにお礼を言い、その場をあとにした。

待ち時間はほとんどなく、おじさんが言っていた場所に到着すると同時に、ちょうど大会開始のアナウンスが流れた。それと同時に、ざっと大会の説明をされる。

『この最強決定戦の歴史は長く、今回で六十三回目の開催となります。年数にすると三百年間の間、この伝統的な大会は開催されてきました。ルールは簡単、地面に膝をついたほうの負け！細かいことは気にしない、それがこの大会のポリシーなので、煩雑なルールは一切ナシでございます！』

アナウンスは元氣いっぱいの声でそう言った。

拡声機能のある魔道具を通してようだが、それがなくても十分なんじゃないかと思うほどの声量だった。

王立学園での統一試験を思い出す内容だ。どこもやることは同じらしい。王国民は随分と血氣盛んだ。

それにしても、三百年以上もの間、このダサ……直接的な名前で大会を続けてきたのか。一体この大会の名前を決めたやつは誰なんだ。そして三百年の間、誰か名前を改めよう

とは言い出さなかったのか。

そんなことを考えながら説明を流し聞いているうちに、第一回戦の選手が発表される。片方は地味な服装や腰に提げている安っぽい武器、なんとなく自信がなさげな雰囲気からして、駆け出し冒険者だろうか。

そしてもう片方は――

「皇……セリナさん!？」

皇帝、と言いかけて慌てて言い直す。

セリナさんは髪を縛り直し、中央に向かって歩いていく。

俺たちと話していたときとは違い、その顔に笑みは浮かんでいない。

特別背が高かったり、険しい顔をしていたりするわけでもないのに、ああしていると、やっぱり少し威圧感がある。

観客席からセリナさんを観察してみると、何も武器を持っていないようだった。

だからといって素手で殴るとは思えないので、魔法を使って戦うのだろうか。

「さっきの人だわ。一体どんな風に戦うのかしら……!」

姉様は待ちきれない様子でそう言った。

魔法神の加護を持つっているからか、それとも本人の趣味か、定かではないが、俺たち三

人の中で一番魔法が好きなのはダントツで姉様だ。それも魔法オタクと言っていいほどの熱狂ぶり。

セリナさんが武器を持っていないのを見て期待しているのだろう。

これから対戦する二人は大会用に設けられたスペースの中央まで行くと、お互いにお辞儀した。試合前の挨拶のようだ。

セリナさんは無意識なのか、貴族感丸出しの美しい所作で、お辞儀をしていた。

名乗ったときといい今といい、果たして彼女に自分の身分を隠す気はあるのだろうか……

『それでは第一回戦、開始!』

アナウンスが流れ、観客席から歓声が上がる。

気が付けば、周囲は沢山の人で賑わってきていた。

さっきまで俺たちがいたところは、すごい数の人でこった返している。

あんなところにいたら、体の小さな俺たちはもしかして潰れてしまうかもしれない。

この場所を教えてくれたおじさんに、心の中でもう一度感謝しておく。

「この手に集え、氷霜!」
《結氷細剣》

そんな詠唱が聞こえて声のするほうに顔を向けると、セリナさんの左手に握られた、ガ